

山下欣一著『奄美説話の研究』

藤井貞和

この書物、山下欣一著『奄美説話の研究』が、文学研究、そして基層文化の研究の、今日まで知られざる暗部として忘却せられていた領域を照明し、今後へ大きく貢献してゆくことは、じつにはかり知れないものがある。既発表の論考その他を集成するとともに、書き下ろし稿をおおきく含んで、川が湖にそそぐようにして成立したこの一冊を手にしたときの、夢遊にも似たというべきか、何かにさしつらぬかれるような感懐を忘れられない。私は一九七六年に「古日本文学発生論」を『現代詩手帖』誌に連載したとき、その中で山下氏の研究が日本文学の古層に光をあてるべき最大の武器であることを発見した。一九七九年、一冊の書物になった『奄美説話の研究』から、あらたまり、日本の物語文学や説話文学の全体像が再検討をせまられてゆくインパクト、必要性を感じないではいられない。

例えば、私は平安時代の女流文学を専攻する者であるが、『源氏物語』をいわば霊的構造として読み直さなければならぬのではないかという感想を持つようになった。書かれた文学の代表的な作品として処理されてしまいがちな『源氏物語』。その口承文学とのふれあいや『源氏物語』の神話性といったことがたしかに注目されてはいる。だが具体的にどう口承の世界にふれ、どう神話(論)的であるのか、議論が進んでいない。『源氏物語』をはじめとする物語文学は、単に神話類型を冷やかに遺存させているのではなく、もっと熱い口承の世界から「信仰」、「霊的なもの」を吸収し、見えない力のほりめぐらされている息づまる構造世界としてあるのではないかと気がついた。「物語と祭祀——神話としての『源氏』——」(『悠久』1号)、「源氏物語論——シャーマニズム要素——」(『ユリイカ』昭和五五・一二)などを諸雑誌に書

かせていただいたのはそれからあとである。

また例えば『更級日記』という女流の日記文学がある。知らないものはないほど著名な平安時代の作品。ここには宗教社会にどっぷり漬かった一女性の足掻き苦しむような物語志向と、そこからの「信仰」への回帰とが語られてゆく。そのようなばあいの「信仰」とは一体なんであろうか。ふつうこれを仏教的「信仰」の一位相ととらえてあやしまない。『更級日記』のうちには「天照る御神」という神の信仰が語られている。これは伊勢神宮の祭神であるとされてきた。だが夢のお告げに「天照る御神を念じませ」(天照る御神にお祈り申しなさい)という人の出てくることが何度もあるのは、どう考えたらいいのであろうか。最近の注釈書がこの「天照る御神」を伊勢の祭神から一応切りはなすようになったのは進歩である。その先へ、発想の転換がせまられているだろう。夢のお告げは『更級日記』にくりかえしくりかえし出て来て、作者(菅原孝標の娘)をしつように追いつめてゆくが、その過程はほとんどそっくり山下氏が『奄美のシャーマニズム』で示されたユタたちのライフ・ヒストリーの中心部

分として語られる成巫過程にかさねられるべき性質のものである。「天照る御神」を奄美のユタたちの天ザシ神にくらべてみることができであろう。むしろ『更級日記』の作者は、ユタではない。だから「物語」と「信仰」とが分裂している。成巫なき「信仰」が作者を苦しめるように、未成の「物語」もまた罪惡として作者には感じられるにいたる。平安時代の貴族はおよそこのような「物語」と「信仰」との分裂下におかれていたとみてよい。その「物語」にしても「信仰」にしても、こういってよければシャーマニクなものであって、しかも分裂下におかれたことが、かれらをシャーマニズムから遠いものにしていく、とまあ、このような図式をどうやら手に入れることができそうなのだ。当時の「信仰」は巫病とか成巫とかいうかたちをとらないにしても、夢告を信じ、超現実の出現を見ることでできたのは、仏教の仮面を借りても、その本性はユタ神のそのように、シャーマニクなものであったと判断せざるをえない。

移し、新たな発想へみちびかれていったというさやかな体験をどうしても告白しておきたかった。乱暴にいうと、色んな分野からの本書の読者が、思い思いの我田引水をもしてもよいのではなからうか。こんな包容力のある書物がほかにあったかどうか、思い浮かべてみてほしい。めったにあるものではない。このふしぎな包容力は本書の大きな特色である。なぜこのように包容力があるのだろうか。私の専攻する国文学でいうと、国文学のうしなってしまった包容性である。学問は厳密でなければならぬが、対象であるべき文学は広がりを持ってるので、枠をはめた切りとりをすべきものでない。硬直した国文学はそのような枠づけに専念している傾向がある。山下氏の学問は奄美の風土に密着したところにはじめられ、したがって枠をあらかじめ設定するあたれでなく、終始、広がりゆく対象世界に身を置いている。本書のなかの広がりには包容力として感じられる。学問の厳密さは採集資料の圧倒的な実証性によって保証されている。まことにうらやむべき本書の学問態度をわれわれはこれから深く学ばなければならぬと思った。

『奄美説話の研究』は、さきほどの『更級日記』との比較でいうと、実に「物語」と「信仰」との一致するところにはじまるところ。つまりシャーマニクな昂揚の状態において「物語」がおとずれてくる、これが言葉の正しい意味で文学の発生にほかならないとすれば、『奄美説話の研究』は、われわれにとって、まさに文学の発生を実証的に論述した書物として位置づけられなければならない。文学の発生を仮説的に、あるいは理論的に論述する、ということは多く行われてきたにしても、それを実証的に明らかにするということはまことに久しい希望であった。

もう歴史の下面におしやられて見えにくくなってしまっていることが、奄美地方ではユタの伝承世界として生きている。上代文学の一である『祝詞(のりと)』をユタの呪詞と直接に比較してみるということもできない。『祝詞』よりもプリミティブであるようなのだ。記紀歌謡の世界に断片的にそのような叙事的物語が歌謡として残されているのではないか、というのが私などの現在のところの推定であるが、山下氏もまた、奄美の島唄の世界を重視しておられるのはなほだ心強いものがある、といわなければならぬ。小川学夫氏の仕事へ引き継がれてゆく性質のものである。

本書のごく冒頭ちかく、岩倉市郎が喜界島から採集して『島』に掲出したまま、『喜界島昔話集』に収められることになった「断片的説話群」をとりあげているが、それら、一群の伝説として処理されてしまいかねない用例のひとつひとつを、山下氏は、ていねいに、洗骨のように洗う。するとそれらの断片がかつての神話の光から照らされて、しずかに自光しはじめる、といった体の、これらは知的昂奮をかきたてる。そのまま『風土記』の研究方法ではあるまいか。

以上、本土の古代文学を念頭に置きながら『奄美説話の研究』を読んでみるという試みの一端である。はなはだ書評らしからぬ書評であると非難されよう。しかし、私としては、この日ごろ、文学研究に、国文学と、口承的な文学と、ふたつあるべきものではない、と痛感するようになった。言いかえれば文字と無文字とのふれあうところに文学研究がはじまる。真の意味での大著『奄美説話の研究』をどこまで深く受けとめてゆくことができるかというところに、国文学の未来がひそかにかけられているような気がしてならない。国文学の分野からでなくても、それは言えると思う。

(ふじい さだかず・東京学芸大学)